

## 生活者の視点を強調

### ぎふ・中国くるぶ交流講座 汕頭大学教授・加藤隆則氏講演

第2回「ぎふ・中国くるぶ交流講座」は10月19日、岐阜市の朝日大学病院ホールで開かれ、中国・汕頭大学長江新聞與伝播学院で教授を務める元読売新聞中国総局長の加藤隆則氏が「中国で教えるジャーナリズム」をテーマに講演した。

『聴く』『交わる』『学ぶ』の語尾を取った無料公開講座シリーズの第二弾で、今回は当協会会員はじめ、県内、愛知県から合わせ約70人が中国の地方文化、若者の日本観などに理解



汕頭大学の学生が製作した日本の伝統文化や先端技術を紹介する映像を基に話す加藤隆則氏＝岐阜市の朝日大学病院西館

を深めた。

加藤教授は3年前から毎年、学生を率いて来日、テーマを与えて日本人に密着取材させる。取材成果は中国・新華社発行の雑誌に連載、あるいは映像化して発信されている。

今年は平成から令和をまたいで京都市内に民泊。京都・奈良・大阪で西陣織の若手職人、料亭の女将、ITロボットが仏教を解説する寺院はじめ元号が令和に変わる街の風景や人々を学生たちは五感で取材した。加藤教授は、学生たちが製作した伝統文化や先端技術の映像を

上映しながら「中国での情報の入手や発信の自由度は日本に比べ低い、困難はあっても知りたいという学生の欲求は中国の方が強い。アニメや漫画などにとどまらない」と述べた。

中国を理解するための助言として多様性や生活者の視点を強調した。「中国料理が世界文化遺産にならないのは、広東、四川、上海など地域ごとの料理がたくさんあるから。中国を一つの国としてとらえるのではなく、地方の歴史や文化、そこに暮らす人々と向き合うことが大切」と述べた。

(講演要旨は2、3面に)

### 新年のご挨拶

岐阜県日本中国友好協会  
会長 杉山 幹夫



あけましておめでとうございます。昨年(元号)が『平成』から『令和』に替わり新時代の幕開けとなる年でしたが、台風19号などの豪雨災害は大勢の死者、河川の氾濫・決壊をもたらしました。犠

牲者のご冥福と被災された方々にお見舞い申し上げ、本年が平穏な年になるよう祈らずにはいられません。

外に目を転じると、昨年10月1日、中国は建国70年を迎え、習近平国家主席は北京・天安門前広場の祝賀式典で世界第2位の経済大国に至る70年の発展を誇示しました。一方で米中との貿易戦争は先行き不透明です。

日中関係は「正常な軌道に戻った」との認識で、今春の習近平国家主席の国賓待遇での来日が内定。国家主席の来日は2010年11月の胡锦涛氏以来約9年ぶり。『第5の文書』や東京以外の視察地が検討されています。私は昨年10月、岐阜市との友好

提携40周年を祝うため杭州市を公式訪問しました。その折に西湖畔・柳浪聞鶯公園の『日中不再戦』碑の前で、岐阜市少年友好訪中団の児童、生徒たちに碑のいわれを解説しました。

国交正常化10年前の1962年に岐阜市と杭州市の代表によって『日中不再戦』と『中日友好』の碑文が交換されたこと、『日中不再戦』の揮ごう者、松尾吾策岐阜市長は飛行機が苦手で私の親父が代わって碑文を持参したこと、『中日友好』の碑は岐阜公園の日中友好庭園に建てられたことなどを話しました。うまく伝わる心配でしたが、彼らは一生懸命聞いてくれました。松尾市長や親父らの苦勞が報われたようで、安堵感

とともにどこからともなく漂ってくるキンモクセイの香りがとても心地よかったです。

今年(2018年)10月、安倍首相と李克強首相が若者や地方間の双方向交流を推し進めることで合意し、向こう5年間に3万人の青少年の派遣を発表しました。1984年秋、胡耀邦総書記の招きで3千人の日本の若者が中国を訪れ、翌年は5百人の中国青年が来日しました。李首相はリーダーの一人で、そのときの青年たちがその後の日中交流を担いました。当協会も次世代を後押しする取り組みを考えてもらいたいと思っています。

## 【加藤氏の講演要旨】

加藤隆則です。中国・広東省汕頭市の汕頭大学長江新聞伝播学院でジャーナリズムを教えています。日本人になじみの薄い土地で、元新聞記者が中国の若者と向き合う中で、感じたこと、教えられたことをお話します。

## ◆汕頭について

汕頭は「スワトウ」と読みます。日本語だと「セントウ」ですが、潮州・汕頭地域の方言（潮州語）です。福建省南部の廈門（あもい）、台湾で話される『閩南（びんなん）語』に近い。汕頭は広東省東部の沿岸部に位置し、深圳（しんせん）から高速鉄道で約2時間。人口約五百万人の地方都市で、1980年代初め、深圳、珠海、厦門と同じ経済特区になったが、人間関係が強すぎて改革開放の波に乗れず「忘れられた経済特区」といわれている。

汕頭の人たちは中原（黄河・長江流域）にルーツを持ち、耕地が少なく多くの華僑を輩出、移住先でも独自の文化やアイデンティティーを継

承している。勤勉で商売上手、団結力が強くアジアで成功した人たちが少なくない。

タイ王国の財閥を牛耳るのは潮州人で、香港ではアジア1の大富豪、李嘉誠がその代表といわれる。李は1928年潮州市に生まれ、39年、日本軍が侵攻すると英領の香港に家族と逃れた。父親を早く亡くし、裸一貫で身を立て家族を養い、戦後、不動産で巨財を成した。

中国は「一人っ子」と思われますが、汕頭で見つけるのは難しい。教



加藤隆則氏の講演を聴く参加者のみなさん

＝岐阜市の朝日大学病院西館ホール

え子たちはきょうだいがいて男子が家を継ぐ。重陽節（9月9日）に海外から大勢の人が里帰りする。祖先を祀る廟には寄付者の名簿が飾られ、子どもたちに奨学金を渡す。『人間が宝』という考え方で、成功者はふるさとへ『教育』で恩返しをする。

## ◆汕頭大学の由来

汕頭大学は李嘉誠が1981年に私財を投じてつくった大学で、彼は潮州人だが経済特区として発展すると故郷の近くの汕頭で人を育てようと考えた。教育部、広東省、李嘉誠基金会が共同で運営。個人ファンドによる中国唯一の公立学校で、広東省が選定する重点大学10校の一つ。

文学部、理学部、工学部、医学部、法学部、商学部、長江芸術・デザイン学部、長江新聞・伝播学部があり、在校生は1万人を超える。芸術・デザイン学部、新聞・伝播学部の頭の長江は、李嘉誠が創業した長江実業グループから取っている。

彼は仏教徒らしく『建立自己 追

求無我（自己を確立 無我を追い求める）』を大学の教育理念に掲げ、名誉主席として毎年卒業式に参列。最後の出席となった2018年は「謙虚で好奇心と開明さを備え、理知と道徳、誠意をもって世界のために尽くし、尊厳と機会を大切に真の勝者となる人生を生きよう」と心打つスピーチだった。

大学の特徴の一つに『国際化』を挙げたい。外国人教師は14%占め、新聞・伝播学部の31人中、10人が米、英、マレーシアなど多国籍で私はそのうちの一人。2018年卒業生の62・56%が海外交流を経験し、省都広州から最も遠い大学だが、世界に最も近い大学といえる。

私は2016年9月からこの大学の教壇に立ち、『中国ネットの世論形成』『人工知能(AI)とメディア環境』を研究しています。それまで（読売新聞特派員）記者として上海、北京に住み、『中国はく』という記事をよく書きましたが、汕頭という南の地味な町に暮らしてみても文化や人々の営みの多様性に目を開かれました。

北京では酒を酌み交わすことが友

だちの証しとなるが、汕頭ではお茶を楽しむことで仲間同士になれる。方言に古代（中原）の発音を残し、『新聞』『自由』など日本語の音読に似た言葉を耳にする。和食や仏料理はユネスコ無形文化遺産に登録されていますが、中国料理はなぜ認定されないのか。四川、広東、湖南、潮州など地方色豊かな料理がいっぱいあり、どれが中国を代表する料理か決められないからだ。

中国のGDP（国内総生産）は6%、米国に次いで世界第2位と新聞の見出しに躍るが、8%を超える省があれば5%以下の省もある。中国人観光客の爆買いはほんの一握り。華美な上海の街を見て中国経済を論じるのは誤り。地方（各省）や生活者に視点を置かないと、この国の本当の姿は見えて来ない。きょうの話で一番言いたい事です。

### ◆新聞学について

私は学生たちに「日中関係のニュースに一喜一憂してはいけない」と教えている。首脳会談や政府間の決め事も大事だが、真摯に向き合ってきた人たちの長い、深い交流があっ

て今があることを忘れてはならない。『君たちの頭の中を拘束するのは何もない。拘束するのは自分で、自己規制したら世界が見えなくなる』と喚起している。

3年前から毎年、学生たちを率いて日本を取材する『新緑』プログラムを実施している。『新緑』とは新鮮、（心の鼓動と同じ発音なので）わくわくする気持ちを表す。学生が考えた取材チーム名で、毎回6〜7人（女子）が参加する。

2017年は九州の福岡・熊本、翌年は北海道、今年が京都・奈良・大阪を回った。九州では農薬を使わずアイガモに雑草や害虫を食べさせる「アイガモ農法」から環境にやさしい農業を学び、北海道では元気に畑を耕し、あるいは老人ホームでボランティアに汗を流す80代の元気なおばあちゃん、おじいちゃんから「年はとつても心は若い」新しい価値観に出合った。

今年4月22日から5月2日まで京都に民泊。老舗旅館の女将のおもてなし、西陣織の世界に飛び込んだ若者、AIロボットが住職に代わって説法する寺、再興された平安貴族

の歌会『曲水の宴』、鑑真ゆかりの唐招提寺の平成の大修理に関わった匠ら、『平成』から『令和』に元号が替わる街の様子などを三脚とカメラを担いで取材し、和服体験や京都外国語大学の学生らと交流した。



和服は『呉服』がルートと説明すると学生たちは驚いていた。中国では伝統を見直す機運が高まっている。学生たちには和服を着てみたいとせがまれ、叶えてあげました。日本人が別な視点で伝統文化を見直す

いい機会だ。

学生たちは帰国後、取材成果を動画や文章にまとめ、中国の有力な動画サイトに配信したり、海外特派員が寄稿する新華社の雑誌『環球』に投稿したりした。『環球』では中国から日本に伝わった文化がどう伝承され発展したのか、6回にわたって連載された。

### ◆日本の学生に向けて

中国の学生は日本への関心が高くいろんな事を知りたがっている。情報への入手や発信の自由度は日本の方が高いが、困難を受け入れ、それをバネにして壁を乗り越えていく。世界に関心の低い日本の学生の方が心配だ。日中は対等に付き合える時代が来た。自分たちの価値観を絶対と信じ、相手に当てはめるのではなく、向き合う相手や国を愛していくことが大事。私自身、学生たちにしつかり向き合っていきたい。

来年は東京五輪、再来年は東日本大震災10年の被災地を取材予定。その後は未定です。もし受け入れていただけるなら岐阜に来たい。

## 岐阜市・杭州市 友好提携40周年 岐阜県日中友好協会も 記念行事に参加

岐阜市と杭州市友好提携40周年の岐阜市代表团（団長・柴橋正直市長、17人）に当協会から杉山幹夫会長ら3人が参加し、10月21日から23日の日程で杭州市を訪れた。

一行は22日、西湖畔の『日中不再戦』の碑を訪れた。碑文は日中国交正常化10年前の1962年に当時の岐阜市長松尾吾策氏が揮ごうし、松尾市長に代わって杉山会長の岳父山田丈夫氏（岐阜日日新聞社長）が杭州市を訪れ、王子達市長と碑文を交換した。王市長は「中日両国人民世世代代友好下去」と筆をふる



日中不再戦の碑にまつわる話を杉山会長から聞く岐阜市の児童、生徒たち＝中国・杭州市西湖畔

い、その碑は岐阜市の日中友好庭園に建てられた。

杉山会長が現地で一緒になった岐阜市少年友好訪中団（団長・鶴飼高男長良東小校長、15人）の児童、生徒に碑文交換のいきさつ、意義、エピソードを紹介した。児童、生徒たちは両市の交流の歴史を事前学習していたが、当時を知る人ならではの話しに耳を澄ませていた。

一行は中国美術院や中国のネット通販企業・アリババを見学した後、夕方から杭州市主催の記念レセプションに臨み、戴建平常務副市长らと友好交流を再確認した。

### 河南中医薬大が 中部学院大を訪問

介護授業を参観、交流を提案

中国・河南省の河南中医薬大学訪日団（団長・馮衛生副学長、5人）は昨年11月13日、関市の中部学院大学関キャンパスを訪れ、介護実習の授業などを視察した。

高齢化が猛スピードで進み、福祉政策は喫緊の課題の中国で、中医、漢方、鍼灸、看護など29学科に2万人が学ぶ河南中医薬大学は日本の福祉に学ぼうと訪日団派遣を計画した。視察先の相談を受けた北京の中日人民対外友好協会と岐阜県日中友好協会の仲介で看護、リハビリテーション、理学療

法などの分野で定評のある中部学院大への訪問が実現した。

中医研究者の馮副学長、産婦人科医の張大偉第3付属病院長、内科医の彭新教務部長らは人間福祉学部の在宅介護の実習授業を参観、人工知能（AI）を取り入れた介護機器などの説明に聞き入った。続いて、古田善伯学長、片桐史恵副学長らと懇談。馮副学長は当協会に感謝の意を示した後、「中国の大学で福祉系の学部は少ない。今回の訪問を機に中部学院大学との交流を希望。帰国後、留学生派遣を河南省教育庁に提案したい」などと語った。



記念写真に納まる河南中医科大学の馮衛生副学長（前列右から3人目）、中部学院大学の古田善伯学長（同4人目）ら＝中部学院大学関キャンパス

## 岐阜県日中友好協会恒例新春のつどいは令和2年2月1日(土)開催です。

岐阜県日中友好協会新春のつどいは、令和2年2月1日(土)開催です。会場は、ホテルグランヴェール岐山（岐阜市柳ヶ瀬6丁目14番地）

今回の新春のつどいは、乗鞍のふもと高山市の旧朝日村で、飛騨人の人情や文化を発信するグリーン・ツーリズム民宿『喜楽園』を経営する張訳丹（チャン・イーダン）さんを講師に招き、講演会と懇親会を開きます。内モンゴルから縁あって高山に住み、高山の魅力を発信しつつける張さんのお話を聞きながら、岐阜を再発見していただきたいと思います。

会費は6千円（学生3千円）です。たくさんのお申し込みをお待ちしています。